【給食協会賞】給食は好きだが時は早い

作野小学校　比嘉　優月

無論、私は給食が好きである。給食は毎日組み合わせのちがうおかずにかこまれる。だから思い出は日々出きあがるのである。夢と未来、そして希望が輝いている、気がする。

先ほどの私の文を見て、「今まで給食のことをそんな神々しいものとは思ってなかったけど、こいつの文を見てすっげぇ食べたくなってきたぁ」と、感じてくれるお方がいれば私は食レポ系ユーチューバーを目指す余地があるかもしれない。私のすばらしい未来が見えてきたところで、私の幼き思いでを語ろう。

ぴかぴかの一年生。私は自分の給食を食べる遅さを悟った。幼稚園のころから遅いのは分かっていたのだが、幼き五さいに羞恥心も何もない。

だが、年長さんが終わり、一年生になると、みな頭が良くなったと感じる。いただきますから、一言も発していない私よりもお話をしているそこのボーイ達の方が食べるのが早いではないか。早食いと食レポどちらもやります系ユーチューバーとしてスカウトしたいぐらいだ。ふと、辺りを見てみた。今まで同類だった子達がぞくぞくと遅いを卒業していく。みな給食を食べる速度が急激に上がったのだ。私があと米と牛乳だけになると、ナフキンを広げているものは五名を切っており、せわしなく急いで食べていた。給食が遅いイコール迷惑で恥ずかしい、という知識を一年生にして学んだのだった。

私とドベ争いをしていたＡちゃんはスープとお米を残し、大逆転を成しとげ、Ｂくんとは接戦していたものの、満ぱんだと思っていた牛乳が半分以上飲まれており、私は敗者となった。ＡちゃんとＢくんが、ほっとした（私にはそのように見えた）顔つきで食器をかたづけている。私はまだ半分も残っているきらきら輝くお米を、一人悲しく見つめていた。そうしていると先生が来た。けっきょく先生の提案で減らすことになった。お米さんさようなら、さようなら、という失恋演歌のようなムードでエコーされる一年生の思い出――。だと言いたいところだが二年生もそう、変わっていなかった。ただ、マンゴーが出た日はちがった。食べる速度は通常運転だが、先生のマンゴーを残すという毎度の言葉に首を横に深くふった。マンゴーが給食に登場するのは初めてというのもあるが、なによりそのころの果実ランキング第一位をかざっていたからだ。米やミニゼリーならいつものごとく折れたが、マンゴーだけは譲ることは不可能だ、と思って食べた。肝心な味だけは冷たかったことしか覚えていない。

そして、最高学年でみんなの憧れ六年生の今になると、十位以内に食べ終わることも少なくない。（もちろん上から数えて十番目である。）